

たくみ

Craftsmanship

特集 いくちしま 生口島・田坂真吾吹き硝子展

第25号

戦後初の

訪欧文化使節のこと

今年のゴールデンウィークも多くの旅行者で国の内外とも賑わったという。海外旅行者だけでも五百万以上と聞くと、まさに今昔の感にたえない。

第二次大戦前の海外渡航は、幕末の昔から公務、商用、留学がほとんどで、物見遊山などは一部の例外を除いてはまくなかった。何より客船と汽車での移動だから往って帰るだけで一、二ヶ月はかかり、時間と金に余裕のある人でなければ外国に行ける訳もない。

しかしそれだけに福沢諭吉はじめ、身近には富本憲吉、濱田庄司など昔から海外遊学した人に優れた人材は多く、外国で学び、見聞した知識や経験は、近代日本の発展と文化の成熟に大きく活かされたのであった。

戦後の日本では米軍占領下ということもあって政府官僚といえども許可なしには外国に行けない時代があった。

それが一九五一年(昭和二六)七月の朝鮮戦争休戦、九月の対日講和、日米安保条約の調印を経て次第に緩和され、旅券の取得も容易になった。

そして一九五二年初夏、毎日新聞社文化使節として柳宗悦、濱田庄司、志賀直哉の三名の訪欧が実現したのであった。この旅程は五月三十一日夕、羽田を発ち、六月二日ローマ着。このあと市内やパチカン、ボンベイ、アツシジ、フィレンチエ、シエナ、ヴェネチア、ミラノ、ポロニアを巡歴、二十日にパリへ、二十七日にスペインのマドリッド着、トレド、ポルトガルのリスボンを経て、七日にリーチの待つロンドンへ、と大変な大旅行であった。志賀直哉は長旅の疲れで先に帰国するが、柳、濱田はバーナード・リーチと共にイギリス、ヨーロッパの各地を巡歴、アメリカを経て翌年二月十七日に帰国している。この意外と中身の知られていない訪欧記録を折を見て紹介してみたいと思う。

(志賀直邦)

たくみ企画展

生口島・田坂真吾吹き硝子展

会期 平成十八年五月二十日（土）～二十五日（木）

五月二十一日（日）は営業いたしません。

会場 たくみ二階サロン

営業時間 十二時から十九時まで（日曜日・最終日は十七時半まで）



田坂真吾さんの作品

田坂さんのこと

もう一昔前のことになる。山陰出張の折、一日足を延ばし山口県防府の賀谷初一さんを訪ねたことがある。仕事が終わりに、そのまま帰京するには勿体ないのでもう一箇所寄ることにした。「広島に田坂さんに寄れば」ということになった。広島県豊田郡瀬戸田町と電話で住所確認、移動の列車の中で地図を拡げ、探せど見つからない。田坂さんの仕事場は瀬戸内海の島にあったのだ。結局もう一日延ばし、三原の駅前に宿を取り朝一番の連絡船で島に渡



仕事場の田坂真吾さん

ることになった。仕事場はみかん畑の中にあつた。小振りながら一人で仕事をするには動き易い広さだった。炉のバーナーの音がガラス工房特有の雰囲気を作っていた。この時代、宙吹きガラスは倉敷の小谷真三さん、北九州の船木倭帆さん、筆頭に村上硝子、奥原硝子、副島硝子などが活躍していた。その後各地にガ



工房へつづく道から望む瀬戸内海



生口島の玄関・瀬戸田港

ラススタジオが出来、多くの作家が誕生している。

私が田坂さんを訪ねる数年前、全力を尽くして吹き上げた作品をボストンバッグに詰め、東京のたくみをはじめ

とし、民芸店を回っていた田坂さんがいた。

独学でガラス作りを始め、金融機関という安定している職業を辞め、ガラスを本業と決意した彼にとってはさぞ緊張の時だったと思う。

後日、彼が「自分が一生懸命作った作品を見てもらい、さらにそれ以上のものと言われたらどうしようか」と

語った。「退路を断つ」まさに真剣勝負だったであろう。

時が過ぎ、三年前だったか埼玉の大王で個展を開く案内が届いた。オープンングに伺い、陳列された作品に正直驚いた。ここまで仕事の幅が広がったのかと。

今回縁あってたくみで個展を開くことになった。打ち合わせに二月初め、瀬戸田町に出かけた。以前と同じ景色があった。仕事場は移ったものの、海の見える山腹のみかん畑の中にあった。整然とした仕事場に物作りに対する真摯な姿勢がうかがえ気持ちよかった。バーナーの火を止めて迎えてくれた心遣いに申し訳なく思った。

日本民藝館展で仕事の一端は伺えるものの全容はなかなか見る機会がない。この機会に一人でも多くの方々に見ていただきご支援、ご批評いただければと思います。

たくみ 笠原 勝

「アジア民族造形ネットワークシステム」の創設と展開(三) 「世界初色分けアジア全図」を作成

金子 量重

『民族』とは

アジアを歩いての感想は、腐敗した近代化社会では予測できない、遅しく賢明にゆつたりと生きる人間世界の存在を。各国を基盤で支えているのは「民族」だと確認。だが「民族」というと、やれ「民族主義」だ「民族闘争」だのと、政治的な悪い先入観だけが横行しすぎる。すべては白人の資源略奪を目的とした、植民地支配時代の圧制に抗して始まったものだ。その上国内を分断して、民族の対立を煽つての悪辣な統治にも起因する。今こそ彼らが残した悪しき歴史をのり越え、民族の生活文化の正当な評価と再認識が必要である。その上で「国際化」を考

えよう。ここで『民族』を簡単に述べると、①同じ自然環境に住み、②同じ生活様式(衣食住など)をもち、③共通の信仰に心の安らぎを求め、④地縁と血縁によつて結ばれ、“私たち”といえる人間の集団をさす。

ベトナムにはベトナム人とよばれる越(金)族のほか、タイ、ムオン、ジャライなど54の少数民族から成り立っている。彼らの家屋、食事、信仰なども多様だ。もつとも簡単に見分けられるのは女性に民族服である。ベトナムのアオサイ・クワン、インドのサリー、インドネシアのサロン、ミャンマーのロンジーなどを見れば歴然としている。多様な民族は山地、平野、海辺を住み分け、独自の歴史を築

き先祖伝来の信仰を守りながら生活を営んでいる。各国に共通する普遍的な民族の「生活文化」を、正しく見据えるのがアジア認識の基本。これを怠るとアジアでの政治、外交、交易も成功しない。アメリカ的な価値感を押し付けようとして、混迷を続けるイラク問題がそれを如実に物語っている。

地域は寒帯、温帯、熱帯、島嶼。雨季と乾季、熱帯雨林、高地、砂漠、と想像を絶する自然環境の複雑さ。アフガニスタンでは朝、夕は春、昼間は酷暑、夜には雪が降る。トルコでは摂氏60度を記録。誰もが自然の摂理に順応しながら暮している。画一的な近代国家観への過信は、目先の利に惑わされ全体を見失う。

日本にはアジアの正しい地図がない。長い間アジアを植民地化して人々を苦しめ続けた、かつての海賊王国ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス、ロシア、アメリカな

ど欧米主導の、近東や中東や極東の名称を鵜呑みにしたままだ。私は東北、東南、南、西の四地域にわけ、紫、橙、緑、青に色分けした。とくにアジア諸族が多く住むシベリアを、東北アジアに入れた『世界初色分けアジア全図』を作成。多くの人が認識できるように各地での民族造形展や、九州国立及び韓国国立中央の両博物館の金子量重室揭示。

「落花の舞に踏み迷う」

日本人の民族性

日本には初日の出への遥拝に始まり、「落花の舞に踏み迷う交野の春の桜狩り、紅葉の錦着て帰る嵐の山の秋の暮れ」(太平記)、「菜の花や月は東に日は西に」(蕪村)、「さ霧消ゆる湊江の、舟に白き朝の霜」(小学唱歌)、五月の空に泳ぐ鯉職などに見るような、目に眩ゆくそして侘しく移ろう四季の色。時の流れに添って生まれた多

彩な着物の模様、土、木、竹で造った多様な器の形、藁屋根の柔らかな線。漆碗と味噌汁の香り、暖かいにぎり飯に地方色豊かな漬物の味。「振り仰ぎて三日月見れば、ひと目見し人の眉びき思ほゆるかも」(万葉集)と歌われた、神秘的に姿を変えながら輝く月の光。鎮守の森を中心に展開される豪快にして情緒纏綿たる、民族のエネルギが爆発する、祭とお囃子に山車や神楽。除夜に象徴される鐘の音など民族独自の風格が存在する。それが日本民族の精神風土や暮らしぶりの基盤を築き、「伝統」として今日に受け継がれてきた。

日本を正しく学び

アジア認識を深める

まず日本民族の生活文化を学んだ上で、アジアそして広く世界に目を向ける教育への転換こそ急務。日本史、東洋史、西洋史といった教え方は時代遅

れだ。「東洋史」とは日本、韓国、中国が対象で、他のアジア諸国は含まれない。西洋史“にはアフリカや中南米は入っていない。これでは世界史になるまい。高校の「世界史」は全面的に書き替えよ。日本人の活躍舞台のアジアでの広がりや、アジア諸民族の在日が最も多い現在、まずアジア認識の高揚から始めるべきだ。その上で全世界を対象にするのが筋道であろう。日本人は明治の初め怒涛の如く押し寄せた近代文明に圧倒され、アメリカに負けたことで戦後六十年、未だに“西洋人“コンプレックスに陥つたままでは困る。彼らが入る前には、韓、唐、天竺や遙か胡から千数百年にわたって、アジア諸民族の多様な生活文化や信仰を、民族性にあわせて受け入れ合わなければ拒否した、父祖の賢さを忘れてはなるまい。長い間見落としてきたアジアの生活文化を支えた造形技法と、暮らしの場での知恵に再び注目してもらいた

い。彼我の異同や複雑な民族性とうどう付き合うかを考えてみよう。

芸術——辺倒を排し、自然を

”カミ”と仰ぐ生活文化の確立を

人の”生き方”と”もの”との関わりを捉えることができたのは、アジア諸民族の自然と一体となった暮らしに魅せられ、訪ね歩いて彼らの知恵から学んだ。わが歴史教育は権力者中心の政争史が主流をなし、地域に住む人々の暮らしの歴史を重要視しなかった。かつ明治以後安易に用いた西欧渡来の”ART”（芸術）を過大評価したままだ。この概念は個人作家の絵や彫刻が主流をなし、彼らの表現様式や価値感に合わない、他の地域や民族の”ものは、未開、野蛮、奇妙と蔑んだ。思いつ上りの激しい風潮に洗脳されたものだ。欧米を凌駕するものは日本やアジアにも多いが、行政や教育者は気づこうとしない。八十年前、大原孫三郎

（大原美術館創設者）や松方幸次郎（国立西洋美術館所蔵）が、印象派絵画を収集したのは高い先見性と評価できよう。だが未だにそれらを絶対視する風潮は、もはや現代には適合すまい。なにしろ”思い込み”の激しい性格の日本人だけに、このような偏り多く誤った芸術（美術）教育は早急に改

廃が望ましい。このままでは自由に伸びる可能性を秘めた子ども達の眼界を狭め、”もの”を素直に見る目は育たない。猫も杓子も芸術と名がつけば高級だと、錯覚して騒ぎ立てるのはブランド志向に似た心の貧しさか。地域、民族に関わらず自由な心と目で見る努力を放棄して、つまらない”肩書き”や”賞”や有名性に踊らされないように。

『民族造形』の定義と活動

”もの”は聖俗貴民に関わりなく

アジア諸民族も宇宙（日月星辰）や土地の自然を”カミ”と仰いで尊崇し、

そこから得た恵みの素材を、匠は磨き上げた伝統の造形技法により、”もの”

造りに励んだ。生まれた命を慈しみながら、大事に使った人々がそれらを育て継承した。これらは老若男女、聖俗、貴民に関わりなく、”もの”がなければ暮らしは成り立たない。具体的には、衣、食、住、信仰、学び、芸能、遊び、生産・交易などの場で使う”もの”は、生活の苦楽や周辺からの伝播や域内での変容を物語る。これを総合したのが「生活文化」であり、歴史を学ぶ基本に据えるべきである。これらの”もの”の探求により、人間の生き方の実態が具体的に浮かび上がってくる

それらの”もの”を熟視すると、その奥には温帯と砂漠といった自然環境の相違による「地域性」、ヒマラヤの山懐に住むネワール族と、四季の豊かな島国の日本民族の精神性や生活習慣の違いによる「民族性」、時の流れによつて移り変わる「時代性」が潜んで

いる。これこそあらゆる地域に生きる人々の、人間形成に重要な役割を果たす。とくに強く現れるのが『民族の造形感覚』であり、現代産業といえども人間の創造力の源はここに始まる。例えば日韓中の家屋、寺塔、衣服を比較すれば、“もの”造りに秘められた、父祖伝来の民族の知恵と造形感覚の違いは一目瞭然であろう。

長年調査した日本やアジア諸民族の生活文化を支えた“もの”に、新しい用語を贈りたいと考えてきた。そこで“もの”を造る普通名詞の『造形』に『民族』を加えて、『民族造形』(Ethno Forms)の用語を創った『民族造形』『アジア』を冠して『アジアの民族造形』とした。人間の生活文化を考察するには、欠き得ない重要な概念であり、新しい学問体系の確立につながる。『民族造形』の用語は、アフリカやブータンの民族造形といった具合に、世界のどの地域にも適応できる。

調査と資料収集と普及をはかるために、アジア民族造形文化研究所を創設。アジア認識の拠点として講座や展覧会などを展開した。

『アジアの民族造形展』

一九八九年五月竹内順一学芸部長(東京芸術大学美術館館長)が、五島美術館でわが国初の『アジア民族造形展』の幕を開いた。その後岩手県立博物館、水沢、茨城、清水、長野、滋賀、広島、石垣島などでも開催。さらに素材別に「土の民族造形展(東京)」、「木の民族造形展(高山、駒ヶ根)」、「漆の民族造形展(ミャンマー、カンボジア)」、「皮革の民族造形展(姫路)」などを紹介した。また地域展では「韓国展」(東京、駒ヶ根、さいたま)、「日本展」(ソウル)、「インド、パキスタン、ミャンマー展」(さくら市)を開いて、各民族の素材選定や造形技法の比較ができた。一九九八年国際交流基金の中

山恭子常務理事(前内閣府参与)、吉野草平芸術展示部長(現常務理事)らのご尽力で、日中国交回復二十五周年記念の「アジアの民族造形展」を北京市人民文化宮で開催。アジアの民族造形に始めて接し欧米の展示より親しみがもてたと中国人から好評を博した。これには六万人が入場。アジア諸民族が相互にアジア認識を深める時代の到来を予感。「アジア職人文化専門家国際会議」は韓国、中国、ミャンマー、インド、ネパール、イラン、トルコから専門家を招待した。白熱した実演は参加者たちを興奮させた。さらに同志とアジア民族造形学会を設立。翌年には韓国服飾研究の第一人者金英淑(キム・ヨンスク)女史が、研究者、匠、博物館員らの専門家を糾合して、韓国アジア民族造形学会を設立。相互に展示や研究発表を行っている。

つづく

(アジア民族造形文化研究所長)



大日窯の食器

たくみ歳時記

有田焼大日窯の器

有田は陶磁器の大産地だが、なかでも大日窯の作には特色があつて知る人ぞ知る窯であつた。昭和三十五年に窯を創始された久保英男氏は、もともと

初期伊万里の熱心な研究家で、その美しさを何とか現代に再現したい一心から染付中心の仕事を始められた。

それだけに実用中心の器に描かれた染付模様は、草花文、柳文、兔や風物文、あみ目やとくさ模様など古伊万里の伝統を生かしながら、自らの創意も加えて多岐にわたる。

器の形態も現代の暮らしを考えて工夫を重ねている。有田ではいま量産のプリント模様が全盛で、手の技による染付の仕事は柿右衛門窯など有名美術作品を除いては大日窯だけである。その二代目久保徹氏が昨年未、事故で亡くなられてしまった。まことに痛ましいことだが、いずれ子息が三代目を継がれる話もあつて期待されるのである。

写真の品は徹氏存命中の作で、左から兎文角小皿、野菜文飯碗、柳文徳利、ぐい呑、赤絵ジャム入など。価格も安くふだん使いにもつてこいであろう。

あとがき

駒場東大前の駅を降りて閑静な家並みの道を右に曲がると、日本民藝館の正面に出る。それに向き合つて西館の長屋門と、柳宗悦の旧住居があるが、これが五月に無事復元修理を終えて公開されることになった。

思えば柳が自らの設計による新居に移り、その翌年の十月に日本民藝館が開館したのだからいずれも七十年の歴史となる。この七十年は戦争と敗戦、復興と高度成長、そしてバブルの崩壊と、我々は社会の激変を経験した。

しかし日本民藝館と、そして真、善、美の世界の実現を願うその志と運動は変わることはなかった。いま当面する試練もまたきつと乗り越えられるに違いない。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)